

# 軍事侵攻から2年の ガザ

——取り残される人たち



裏通りには  
がれきが残る



鉄製コンテナの仮設



コンテナの中(すき間が目立つ)



栄養障害のある乳児



足の負傷で自力で立てない

## いまだ6万5千人が避難生活

2014年の戦争から丸2年が過ぎたガザ。幹線道路沿いでは、がれきがほぼ撤去されていて半壊の家も見当たらなくなり、知らない人は2年前に惨状が起きたことに気づかないかもしれません。また道路はかなり修復され、新しい建物やアパートの建設も進んでいます。しかし国際的な復興支援は約束された金額の三割しか入っていないということで、いまなお、6万5千人が仮住まいをしています。

家を破壊された人たちの多くは、借家に住みながら、家屋が再建されるのを待っていて、その一部は鉄製コンテナに住んでいます。ハンユニスホザ地区は2014年の戦争で多くの家屋が破壊され、大勢の死傷者ができました。カメラを持った外国人を見ると、幼い子どもたちまで「メディアだ!」と反応します。生後1週間目の赤ちゃんがいるコンテナに招かれて、少しだけお話を聞きました。コンテナは砂地の上に土台を作らず置かれているため、夏は太陽の熱にさらされ、冬場は床上浸水に見舞われます。しかしこの家でも失業状態なので、みな我慢して暮らしているのです。

国連難民救済機関 (UNRWA) とパレスチナ自治政府 (ラマッラー)、それにイスラエル政府の合意によって

「ガザ再建メカニズム」という取り決めが2年前にできました。それに基づいて、数か月ごとに被災家庭の再建のための建設資材の搬入が許されていますが、各資材単位での搬入許可です。また資金援助を受けると、部分ごとの建築許可になるため、まとまった工事をするのができないようで、システムを使おうとすると時間がひどくかかります。すでに2年が経過し、待ち切れずに自力で建て替えている人たちもいるため、支援資材の一部が闇市場に流れていて高値で売られているそうです。また2年前には搬入されていた木材や鉄材が、「軍事転用可能」という理由で、最近では搬入許可されなくなっています。

各家庭への電気は8時間ごとに来るとい建前ですが、ガザ市の中心的な住宅地だけのようで、ガザ南部や北部の住民に聞くと1日に4時間とか全く来ない日があるということでした。水の供給も場所によっては2日おきということで、相変わらず厳しい生活です。当会でも配布をした充電式扇風機やLEDランプ、またソーラーパネルなどの需要が高まっていました。

## 障がいを負った人たち

親を亡くしたり子どもを亡くした家族では、生き残った人たちも身体・精神に大きな傷を抱えています。一人息



左側がマヒした3歳の少女

子夫婦を亡くした女性は、残された孫たちの世話を一人で背負っていました。3歳の孫娘は脳の損傷で左半身がマヒしていて立ち上がることができず、お尻で床を進みます(写真上左)。あまりにも幼すぎて、戦争の記憶も両親を失ったことも分かってないようでしたが、表情には不安定さを感じられました。祖母は一時見舞金を受け取ったそうですが、孫たちを連れしないと外出できないため、家屋修復の手続きをすることもできないということでした。

## 500人へのリハビリ支援

いまだに多くの人が負傷による後遺症に苦しんでいます。深刻なケースは脚や腕の切断、脳機能や脊椎の麻痺です。9歳の少女は、脳の損傷で自力では座することもできなくなりました。突然の地上侵攻で逃げ道を失い、階段下に隠れていた一家は家



体を起こす訓練

から出ようとしたところに砲撃を受け、祖母、母親、二人の娘が亡くなりました。父親は息があった娘を抱きかかえ、怪我の軽かった二人の娘たちを連れて、ガザ北部から数キロ歩いて病院までたどり着いたそうです。瀕死状態だった娘は緊急手術を受けて命を取り留めたものの、その後トルコで再手術を受け1年前にガザに戻ってきました。継母と姉妹が彼女の世話をしています。1年近いリハビリによって少女は枕に支えられながら体を起こすことができるようになり(写真上右)、指は動かないものの、両手でスプーンや鉛筆をつかめるようになりました。母を亡くしたうえに自力では動けなくなり、心理的にも非常に難しい状態で、食べることを拒否したり、かんしゃくを起こしたりします。リハビリは続いています、心理サポートが非常に重要になっているとのことでした。

## 1年半で200人が回復

12歳の少年はパンを買いに弟と家を出たところ、ミサイル攻撃の巻き添えになりました。弟は亡くなり、少年は腹部と腰椎に大きなけがを負い、ヨルダン川西岸に搬送されて9か月治療を受けました。この秋から学校に復帰しましたが、左右の腰の骨の高さが違うため跛行しているうえに、排せつのコントロールが効かなくなっています。家では明るい笑顔を絶やさないものの、他の子どもたちのいじめにもあっていて、この少年もリハビリだけでなく心理サポートが必要です。

今年は、ガザの南部と北部で500人近い負傷者へのリハビリを行っています、昨年5月に開始したリハビリ支援の結果、これまでに200人近い子どもたちが筋力を取り戻して通学など社会的な復帰を果たしています。

栄養改善の活動も進めています。低体重、貧血、骨粗鬆、その他の深刻な栄養障害の子どもが非常に多いのです。現在は特に深刻な乳幼児300人に薬剤を出しています。脳性麻痺や心疾患などの持病を持った子どもでは栄養障害が顕著です。三か月間の支援の結果、7割の子どもで体重や身長が増加、ヘモグロビン値の向上などが見られています。

## 2016年 ガザでの新たな事業

### 乳がんの早期発見と啓発

国連人口計画 (UNFPA) や、CFTA などガザの NGO と協働して、乳がんの早期発見と啓発の事業を開始しました。ガザでは女性の死亡率の一位が乳がんです。日本では早期に発見されると乳がんの生存率は70%以上 (イスラエルでも60%以上) ということですが、ガザでは40%以下

です。乳がんの宣告は死亡宣告に近だけでなく、それを理由にした離婚も多いからです。乳がんにかかった女性は離縁されたり、実の子どもたちから関



乳がんの啓発活動

係を断たれるなどの偏見から、多くの女性が受診しなかったり、家族に内緒で治療しようとするなど、戦前の日本を想起させる状況が現在も続いています。ちなみにガザでは、マンモグラフィや超音波などの診断、化学療法と手術はできますが、放射線治療はイスラエルに行かないとできません。

この事業では、女性保健センターで検診を行うほか、精密検査が必要な場合はほかの医療施設に紹介し、

できるだけ早く診断結果を得て、治療を早期に始めることを目指しています。また地域での女性対象の啓発セミナー、近所の人を個人宅に集めた学習会、患者さんの家庭訪問とサポートを行っています。地域での啓発セミナーでは模型などを使って非常に詳しく説明をし、活発な質問が参加者から出されていました。個人宅を借りた会では、電子レンジ、環境ホルモン、精製された砂糖などが話題になっ

ていて、ガザの女性たちもたくさんの情報量を持っていることに驚きました。それにもかかわらず、社会的偏見のために、多くの女性が検診や受診に二の足を踏んでいるという実情があります。10月にある「世界乳がんデー」には、女性たちがピンク色のスカーフをかぶって、大きな人文字で「ピンクリボン」を作ります。

## 学校教育の質的向上をめざして

2014年のイスラエル軍の攻撃で公立学校160校が破壊されました。それ以前から、ガザの公立学校は二部制で1日に4時間しか授業がなく、また西岸政府とガザ政府の対立から教員の給与もきちんと支払われていないなど、教育をめぐる環境は10年前よりも悪化しています。

そこで、小学校の教員に「アクティブラーニング」という参加型の授業スタイルを研修し、また学校で補習クラスを開講するなどして、教員の能力向上と子どもの学習への意欲を上げるための支援を開始しました。今年度5つの小学校と2つの児童館で活動しています。

実施する学校を訪問しました。一つの学校は午前が女子1000人、午後は男子1000人という超マンモス校、

そのうえ二部制の学校で、10年前までイスラエルの入植地があった地域にあります(ヨルダン川西岸では入植地が増えています。ガザではイスラエルの入植地は10年前に撤退しました)。周辺はガザの中でも有数の貧困地域です。教育予算が政府からほとんど降りてこないため、理科室にはフラスコや試験管が数個あるだけ、サッカーボールも1000人に数個しかありませんでした。理科室のテーブルには水道の蛇口やガスの元栓がつい

ていますが、水道は水道管とつながれておらず、ガスもプロパンはありません。子どもたちの座るイスもなかったのにはびっくりしました。子どものときどどのような実験をしたことがあるかと当会の若い地元スタッフに聞くと、道具のほと



新学期の始まった学校

んどいらぬ電気回路の実験は経験したことがある、顕微鏡で植物の細胞を見たことがあるだけ、という答えが返ってきました。

別の女子の学校では、校長以下全員女性の教員で事務職も女性だけです。体罰はしていないということでしたが、教員がゴムチューブを手を持っていたり、教室に棒が置いてあったのが印象的でした。一クラスの人数も多く、クラスを維持するのも大変なようです。子どもたちがクラスでお客さんにならないようにするためには、教員や校長の意識を変えていく必要があります。ガザの中にもある先進的な取り組みを普通の学校にも広げていくため、この秋の新学期から教員の研修を開始しています。



児童館で遊ぶ子どもたち